

100年前の日本にオーストリアからスキーの技術が伝えられた。場所は現在の新潟県上越市。私の住む街である。北大でのスキーの試行の方が3年早く、これによってかつて発祥地論争が起きたが、正式にスキー術を一般に伝えたことにより上越市高田の金谷山が日本のスキー発祥地とされた。新潟県の南部、上越頸城地方は豪雪地帯として知られ、平地でも2mを越える積雪はざらである。少し前にアライスキー場が営業していたときは、しばしば7mを越えたものである。このような背景があって、この地方でのスキー活動は盛んである。スキー汁、スキー正宗、カザマスキー等スキーを冠したものも多い。私も16年前に転勤で直江津に越してからこの地域の山スキーを楽しんでいる。今回、これまで滑降した幾つかの紀行文に写真と版画を添えて紹介したいと思う。ここに記載するのは、ガイドブックなどに掲載されている一般的なコースとは趣が異なり、かなりマニアックなコースである。記録もない未知の場所が多いので、コース探しには自分なりの事前調査を行う。斜面の方角、雪の付き方や斜度を様々な方向から観察し、偵察山行も行うこともしばしば。滑降コースを下から登ってコースの確認と雪質をチェックすることも多いが、雪が繋がっていなくて途中で引き返すこともある。慣れてくると地形図を見るだけで滑降コースが読めるようになってくるが、最終的に滑降できるかどうかはその時の雪質、斜度、天候、自分の技量で決める。近年、山スキーがバックカントリースキーと呼ばれるようになってこれを楽しむ人は増えている。メジャーなツアーコースに人が集中する傾向にあり、夏山で百名山が混雑するのと同じである。情報過多の現代は、情報がないコースをわざわざ選んで登る人は少なくなっている様だ。物見遊山的なピークハントや自然の雰囲気を楽しむ山旅的な縦走を現役時代に行い、今でもこれを懐かしく思うが、登山の本来の楽しみは初登頂・初登攀に代表される未知なる冒険への挑戦だとも思う。しかしながらヒマラヤの初登攀に比べると私など

はちっぽけな冒険で、こんなマイナーなルートを登り滑降する行為が創造的登山といえるとは思わないし、ここでルート紹介しても誰の役にも立たないが、地域にこだわった自分なりのコースを探し出して登山を楽しんでいるモノもいるということで読んでいただければと思う。

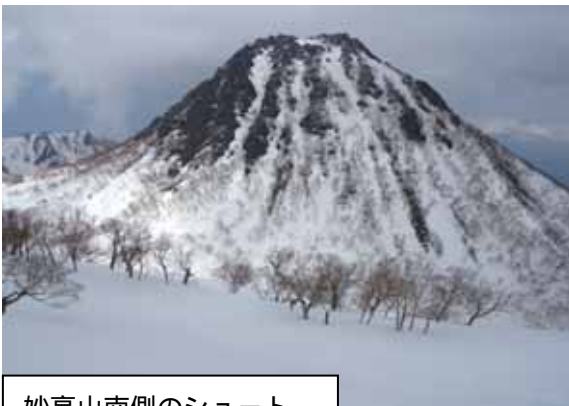
### 妙高山

妙高山は上越地方の象徴的な山である。赤倉山、三田原山、大倉山、神奈山へと続く外輪山の中心に溶岩ドームの妙高山がデンと鎮座している。笹ヶ峰から湊沢経由で、あるいは杉の原スキー場から三田原山に登ると妙高山の南側が姿を現す。妙高山は南側にシュートが3、4本有るが、向かってやや右側にシュプールが付いていることが多い。私も最初に妙高山を滑ったのはこのコースで、短い程良い傾斜と真っ直ぐなコースは快適だった。左側のシュートほど傾斜が急になり、岩に挟まれたルンゼ状のここを滑る人はあまりいない。

池ノ平や赤倉温泉のスキー場から眺める妙高山の東側は溶岩ドームの爆発火口の崩壊地であり、火砕流が北地獄谷を形成した。燕温泉から春遅くまで雪が残る北地獄谷を詰めて、あるいは冬に赤倉スキー場の下から滝沢尾根経由で前山をトラバースしながら登り、鎖場の上から滑降すること数度、これに飽きたらず頂上から東壁を滑降できないものかと登山道の尾根よりも1本北側の尾根に登ると、頂上直下の山の字雪渓へと細いながらも雪は繋がっていた。山の字雪渓へは三角点がある妙高山北峰と南峰の間からドロップする。山の字雪渓の出口は、時期や年にもよるが5月中旬で最小幅2～3m傾斜50度の細い雪壁である。ここを慎重に斜滑降とジャンプターンでクリアすると、北地獄谷とその下の称名滝へ繋がる白いスロープが続く。

妙高山北側も崩壊によって形成されたルンゼ群がある。頂上から大倉谷に向かって北東に延びる中央ルンゼが最も大きい。頂上直下は凡そ55度の傾斜で多くの岩が露出しており私の技術を越えている。三角点のある妙高山北峰からルンゼ群の降り口へは雪が繋がっておらず藪こぎになるし、ルンゼはたくさんあって上から眺めても降下点が不明

瞭なので、地図上の長助池付近の下から滑降コースを確認しながら登っていくことにする。妙高山北峰から真北に伸びる雪渓が滑降可能な様だ。これは北面ルンゼ群の一番西側に当たる。滑り初めは傾斜 45 度で幅が狭いが、ここを過ぎると広い雪の帯が大倉谷の下の方まで続いている。南側のシュートに比べると難度、スケールともに一段上である。



妙高山南側のシュート

### 神奈山

頸城平野に桜が咲く 4 月中旬に神奈山北斜面に跳ね馬の雪形が現れる。杉みき子の童話にも出てくる妙高山の跳ね馬シブキは、正確には神奈山山腹の雪形のことを指すのである。高田城の夜桜だけでなく、跳ね馬の雪形が現れるのを見て新潟上越の人々は春を感じる。神奈山頂上から真北に延びる尾根を滑降すると、跳ね馬の背中あたりを通過し、神奈山東側の尾根を一段下ったところから真北の谷を下ると跳ね馬の足下となる。近くで見る跳ね馬は巨大な岩で、どこが頭だか足だか判別不能である。ここをどこまでも下っていくと自衛隊の演習場に出してしまうので、滑った分登り返さなければならない。

### 火打山

火打山の南斜面は春に多くの人々が訪れる山スキーのメッカである。一方、穏やかな南側と打って変わって火打山の北面は厳しい様相を呈している。

糸魚川の笹倉温泉から登る溶岩台地からの焼山の噴煙たなびく風景は有名だが、ここから眺める火打山の雄大さも忘れることができない。賽の河原のギャップを渡ると城塞の様な火打山の北西壁をバックに木が 1 本だけポツンと立っている所がある。この風景が好き

で、これを見るために何度も北西壁を登り、そして滑降した。火打山北西壁は幾つものルンゼが入り組んでいる。向かって右側のルンゼが最もスッキリしてお気に入りのコースだ。午後にならないと日が当たらないのでクラストしている場合が多いが、雪質を見誤ることがなければ 40 度プラスの傾斜はそれほど厳しくはない。北西壁を登って滑降が厳しそうな雪質ならば、頂上から北に延びる空沢尾根や陰火打から西北西に延びる一般コースからエスケープすればよい。

新井の矢代川から眺める火打山右側の新建ドームには 4 つのルンゼがある。左側から第 1 ~ 3 ルンゼ、高高ルンゼである。第 1 ルンゼは狭く直線的だが何時行ってもデブリで覆われていて快適な滑降は望めそうもない。第 3 ルンゼへは 5 月頃には尾根上に雪が繋がっていないことが多く、最も広く標高差のある第 2 ルンゼが滑降の対象となる。火打山頂上から真北に延びる尾根を降りて平らになった所が新建尾根と空沢尾根の分岐点の新建ドーム頂上である。ドーム北西側が第 2 ルンゼの降り口となる。滑り初めが 45 度の斜面だが、朝日を浴びて緩んだ東側の斜面は落石が少なく快適なジャンプターンで下れる。5 月の中旬にここを 2 度ほど滑り、澄川を火打山まで登り返して笹ヶ峰に下った。雪の多い年の 4 月上旬だとそのまま澄川を滑って矢代川第 3 発電所まで下れるだろう。



火打山頂上にて

### 阿弥陀山

来海沢部落から海川第一発電所を過ぎてデブリで覆われた海川溪谷を進むと視界が開け、通称 732 高地と呼ばれる発電所取水口の台地に出る。ここは海谷の上高地と呼ばれ、残雪の頃は水芭蕉と新緑が美しい桃源郷だが、早

春の今は静寂に包まれた白銀の世界だ。ここから阿弥陀山頂上から南西に延びる沢を登っていく。沢の最上部の地図上には崖マークが付いているが、雪が付いていれば普通の斜面である。頂上からの眺めは、東側の吉尾平側と南側の阿弥陀山南峰方面の絶壁の高度感が素晴らしい。732 高地の白い台地を目指しながらの阿弥陀山南西沢の滑降は傾斜が緩くデブリもなく雪質も良く快適である。

焼山温泉から入山し吉尾平から見上げる阿弥陀山と烏帽子岳の東側の岩壁は荒々しく、とてもスキーができる様には見えないが、1カ所だけ阿弥陀山の肩に雪が繋がっている。雪庇崩壊の危険が少ない風が凧いでいる曇りの日の早朝が狙い目である。雪庇を頭上にしながら登って行くのは心中穏やかでないが、何時崩れても逃げられる様に谷の中心を外して登っていく。雪庇を越えると阿弥陀山と烏帽子岳を結ぶ稜線に出る。阿弥陀山頂上へは稜線をやや西側にトラバース気味に登って行く。後ろを振り返ると烏帽子岳の尖峰が空を突いている。高度感溢れる烏帽子岳南西側は垂涎の斜面だ。さて、阿弥陀山の東斜面は朝日が当たって雪の緩むのが早い、吉尾平を見下ろし岩壁を背にしながらの豪快な大斜面の滑降である。



烏帽子岳南面

### 雨飾山

雨飾山は小谷温泉からの南尾根上 P2 と呼ばれる 1838mピークからの滑降が一般的である。私も最初は小谷温泉から入山し、頂上から笹平経由で荒菅沢や夏道側の南東側の沢を滑っているうちに、糸魚川から見える北面の真っ白い大斜面を滑ってみたいと思うようになった。まずは 1472m、1673mピークを経由する北西尾根。1673mピークの広い台地

にスキーを置いて細い尾根を辿ってピッケルとアイゼンで頂上を往復するが、雪庇に注意すれば頂上からの滑降も可能に思われる。糸魚川市の梶山新湯からの夏道のある薬師尾根は、無雪期ならばハシゴやロープのある急な尾根だが、これらが雪で埋まっている時期は頂上直下の笹平からの無立木の大斜面の滑降を楽しむことができる。

薬師尾根を何度も滑るうちに、薬師尾根西側の神難所沢滑降の可能性を考える様になった。ここには下部にルンゼ帯と滝があり、この通過がキーポイントになる。駒ヶ岳頂上から神難所沢の全貌を眺めることができるが、大雪の年ならば滝は雪で埋まっていそうである。大雪の今年の春、ここの往復滑降を目指した。梶山新湯手前から神難所沢を登っていく。幾つかの雪に埋まった堰堤を越すと、壁の両側からのデブリによって谷は覆い尽くされて、大滝は予想通り埋まっている。スキーを担いでアイゼン履いてこれを越していく。滝を越すと谷は広くなり雨飾山北面の大斜面が見えてくる。標高が上がるにつれてデブリは少なくなり、糸魚川の街を眼下に白い雪の斜面を登っていく。頂上西側の 1842m ピーク付近から滑降する。上部の 45 度の斜面はクラストして難しいが、傾斜が落ちてくると雪面が緩みデブリを避けながらの滑降となる。大滝付近のデブリはあまりに大きく、ここを下るにはスキーを脱がなくてはならないが、西側から巻いて小さな尾根を乗り越えた谷を下っていく。ここもデブリの山だが何とか滑降可能で、滝の下に合流する。堰堤を越えると春の日差しを浴びながらの快適な林道滑走である。



薬師尾根上部からの雨飾山北面

## 銚ヶ岳

系魚川、能生、そして自宅の直江津の海岸から真っ白い銚ヶ岳が見える。標高は1316mと低いが、海岸近くからそそり立つ姿は十分に立派である。頂上付近だけは穏やかな傾斜だが、これに至る尾根は細く谷はルンゼ状で深く急峻である。まずは佐伯郁夫の「会心の山」にも紹介されている北東尾根を登る。佐伯氏は柵口部落から登ったが、溝尾部落から林道を500mまで登り、そこから杉林の尾根を登っていく。杉林を抜けて875mの尾根の上に達すると金冠山のドームが目に入る。これを直登して越えるのは大変なので、雪が安定している日を狙って北側にトラバースし、金冠山北東側の谷を巻く様に登っていく。1244mの大沢岳からは、北東の金冠山、北側の眼下には島道鉱泉と日本海へと続く高度感溢れる眺めが素晴らしい。銚ヶ岳頂上から南に聳える火打山や海谷山塊の眺めを楽しんだ後、大沢岳まで緩やかな尾根を滑るとここから本格的な滑降となる。金冠山北側の北東側の谷は滑り初めがやや傾斜がきついが広く快適な斜面である。標高600mまで滑って北東尾根に登り返して溝尾部落への林道をスキーで下った。

大沢岳から真っ直ぐ北に伸びるルンゼは最大傾斜55度の急斜面だ。北斜面なのでクラストしており、最大傾斜のルンゼ内は雪崩の通り道になっていて激しく波打った蒼氷になっている。これではジャンプターンの着地でビンディングが外れるかもしれないので、ルンゼ内でセルフピレーを取ってスキーをアイゼンに履きかえて下る。ここを過ぎると傾斜が落ちて広い斜面となりデブリが広がっていく。この日も東側にトラバースして北東尾根に登り返して溝尾部落へ下った。

島道鉱泉から大肩の背を經由して大沢岳に至る北尾根を登り滑降したのは6年前、今年はこの東側の沢を下から登った。島道鉱泉から下の台地に降りて2つの沢の内、山に向かって右側の西側の沢を登る。沢の下部はルンゼ帯となっており、ブルドーザーで運ばれた様なデブリや、左右の尾根から落ちてきた大量のブロック雪崩で埋め尽くされている。ここを抜けると視界が広がり、昨年滑降した大沢岳北側ルンゼが正面に見える。今日は東側にトラバースして温泉マークの付いている東

側の沢の上に出る。ここを登り詰めたところが金冠山北東谷である。本日は曇りの天気予報だったが、太陽が出て気温が上昇してきている。通常ならばラッキーなのだが、今日は途中通過したルンゼ帯両側岸壁の上部に積もっている大量の雪のブロック崩壊が気かりである。早々と頂上は諦め、金冠山手前から滑降することにした。



北東尾根から金冠山と北東谷を望む

## 黒倉山

長野と新潟県境の脊梁となる関田山脈は、無積雪期には信越トレイルとして多くのトレkkerが訪れる。関田山脈の新潟県側は急な崖になっており、土砂崩れの痕も多く見られる。幸田文の書いた「崩れ」には十日町市松之山の土砂災害が記されているし、上越市の板倉には地滑り資料館なるものがある。この辺りは、これまでも数々の災害に見舞われている崖崩れや雪崩の多発地帯である。東日本大震災の翌日、関田山脈を震源とする震度6強の地震が起き、十日町市や栄村で多くの雪崩や土砂崩れが発生した。その当日、関田山脈の三方岳の北壁を滑る予定であったが、宮城や岩手の津波の惨状を見て、それと何かイヤな予感があって登山を中止した。これより2ヶ月経過した5月の中旬に残雪の北壁の谷を見に行った。まさに震源地であったこの場所は、新緑の芽吹き的美しさに対比するかの様に大量のデブリと崩れた土砂で谷が覆い尽くされていた。予定通り登山に出かけて地震の時にこの場所にいたら、昔のこの地域の伝説に出てくる人柱になって、まだ雪か土砂の下に埋もれているのかもしれないと思った。命を拾った感じがする。何れにしても、新潟側が崖になっているのは大地震による土砂崩れによるものなのだろう。急斜面の滑降を指向すると、崩れの場所と無縁ではいられない。

さて、黒倉山は関田山脈の西側に位置し、通常は長野県側の温井部落から登られる鍋倉山から足を伸ばす。私の場合は新潟県側の板倉の柄沢部落から、最も雪深い2月頃に登る。メロウな斜面の長野県側とは様相が異なり、北西の新潟県側は急に落ち込んでいる。滑降ルートの候補は何本かあるが、最も急なのは最高点 1242mの西側ピークの真っ白な北西斜面である。ここは滑り初めの谷状のオープンバーンが傾斜 50 度で、頸城平野を見下ろしながらの滑降はまさに落ちていく様な感覚。中間部の無積雪期に滝がある所を過ぎて傾斜が緩んでくると、雪崩の恐怖感から解放されて一段と深いパウダー滑降を満喫できる。

雪は、肉眼で見えるぐらいの数mmの六角形結晶が積もっている時が最も比重が軽い。気温が低すぎると結晶成長が不完全だったり、あるいは結晶の枝の長さが短かったり、もちろん気温が高すぎても結晶が溶けてしまって重い雪質になってしまう。気温が低すぎても、もちろん高すぎても駄目で、適度な湿度も必要であり、上越地方の山はこの条件を満たしているようである。黒倉山北西の正面壁を安心して滑降できるぐらい雪質が安定している日はそうはなく、雪質に少しでも不安を感じる場合は正面脇の傾斜がやや落ちる疎林を滑るのだが、それでも黒倉山北面のパウダースノーは何時来ても裏切られることなく軽くて良質である。



黒倉山北西壁を滑り終えて

### 米山

どこから見ても三角錐の米山は展望と信仰の山である。人気の山であり、冬でも登る人は多い。但し尾根が細いせいか山スキーを

する人は少ない。少雪の年は藪でスキーが出来ないので毎年は登れないが、これまで北尾根の吉尾コース、水野部落からの南西尾根、西尾根の大平コースを何度も登り滑降した。

水野部落からの南西尾根は、805mピークから一旦下って登り返すところの雪庇が大きく、これを避けるために西側を巻いてスキーを担いで登るところの胸までのラッセルがきつい。全体的にこの尾根は日本海からの季節風を横からまともに受けるので、標高 900mクラスと思えないほど雪庇が大きく張り出している。雪庇を踏み外さない様に、特に視界が悪い吹雪での滑降には注意が必要。標高 600mから林道をショートカットして下る所は真っ白な斜面で、この尾根の最後のハイライトである。

頂上小屋のノートを見ると、冬には殆どの人が大平部落からの西尾根を伝って登っている。西尾根にはトレースがあり、日本海を背に楽に登って行ける。天気が良くて雪崩の心配があまり無いときには頂上から北東斜面を滑る。ここは季節風で運ばれた大量の雪による立木がほとんど無い広い斜面が続いている。あまりにも快適なパウダー斜面なのでどこまでも滑っていきたいが、下は水流が出ているだろう。標高差 300m程滑って頂上へ登り返す。大平部落への下りは、登りに通過した西尾根上の 711mピークに登り返さずに西北西の沢を下る。スキーの機動力を生かしてあっという間に大平に着く。

### 番外 春日山城

2009年のNHK大河ドラマ「天地人」の舞台にもなった春日山城だが、少雪の近年はスキーが出来るほどの雪が積もらなくなった。数年に一度の豪雪の年だけの楽しみである。毘沙門堂からの谷や杉の林の間を縫って下ったりする。春日山城の城主だった上杉謙信は、能登畠山氏の七尾城を攻略した祖先の仇ではあるが、こうしていると不思議な気分である。戦国時代に鉄砲と同時にスキーが伝来したならば、謙信もこのような冬の楽しみを見つけただろうか。

学生時代から始めた山スキー歴が 30 年近くなり、500 日ぐらい雪山を滑降した。誰に教えられることなく、独りで我流のスキーテクニックを磨いてきた。ここ 20 年は仕事に

家庭に忙しいので、泊まりがけの山行など持ったの外、半日だけの短い時間だがそれなりに充実はしている。その殆どが単独行だが、家族に迷惑をかけずに無事故で過ごすことができたのは何よりである。雪崩や転落による事故が起きると助けてくれる人がいない単独行は危険であり他人には勧められないが、結構慎重な方だし判断を誤らない限り安全であるともいえる。複数で滑ると2人目が滑るときに最も雪崩が起きやすいというデータもある。それでも何時も夜明け前の真っ暗な中を一人で登り始めるときは少し気持ちがブルーになるし、雪質が微妙で判断に悩むこともしばしば。緊張感を保ちながら登り続けるのは大変だが、天候や雪質が悪い場合は無理をしないであっさり頂上を諦め安全なルートに変更する考えは、長く続けるのに必要と悟っている。北アルプスにも滑りに行くが、豪雪地帯の近郊にこれだけ面白いルートが無数に存在する、この恵まれた環境を享受していきたい。

近年のスキーの道具と技術の進歩は目覚ましく、100年前のレルヒさんが現代の我々がパウダーの急斜面をかつ飛んでいくのを見るとびっくりするだろう。圧雪されたゲレンデでは滑りにくいと思うが、最近のパウダー専用マシンは中心が最も太い逆ベントや、トップからテールにつれて徐々に細くなる逆三角形など何でもありという感じだ。軽いパウダースノーではスキーの選択肢が広がるし、様々なスキーに適応した色々な技術で自由に滑れる楽しみがある。僕自身はレルヒさんの頃の2mをはるかに越える長尺寸胴の幅広スキーでパウダーを滑ってみたい。イージーに滑れる短いカービングスキーも飽きたし。

秋田の片田舎で育った子どもの頃、長靴を皮バンドで止めた(カンダハーというビンディング)スキーを履いて雪原のウサギを追いかけていたのが自分の山スキーの原点である。この時の印象を懐いたまま半世紀近く経とうとしている。何時までここに住むかわからないが、これからも自分なりのルートを探して妙高、頸城の山々を彷徨することだろう。

### 主将あいさつ

こんにちは、現役主将の平松誠です。2011年度は1～4年生、総勢37人で活動してきました。今回は、今年度の現役生の活動を皆の感想を通して、紹介していきます。

### 【1.夏合宿】

#### 北アルプスパティー

日程: 9月7日～13日

L: 五島 雄太 S L: 伊沢 麻衣子

ルート: 折立 薬師岳 雲ノ平 鷲羽岳  
槍ヶ岳 奥穂高岳

・最後の夏合宿は何としても北アルプス。2年の夏合宿、台風で槍のほんの手前で下山したときから、このリベンジを必ずや果たそうと決めていました。折立から入り、初日から我らが晴れ女の力で絶好の登山日和となり、気持ちよく歩きました。2日目も順調に行き、明日からは百名山のオンパレード！と思いきや翌日起きた時にはガスが一面に。歩き始めても雨風が強くなるばかり、水晶は端から諦めていたものの、鷲羽が諦めきれず強行、これが判断ミスでその後は酷いものでした。皆が全身びしょり、翌日には体調を崩してしまう人も。槍の手前まで来た時、再び途中下山を考えなければならなくなりました。しかし、それでも何とか切り切り、そこで目の前に聳えるは念願の槍ヶ岳。皆の頑張りに感謝し、その後は快調で、奥穂高岳では東に御来光、西には仲秋の名月とジャングルムという奇跡的な絶景を堪能して、7日間に及ぶ人生最高の山行となりました。(3年生・五島)

・夏合宿が始まる前、私の経験の中で最も日程が長い山行ということもあり、心中は期待よりも不安でいっぱいでした。しかし、いざ山に登ってみると、確かに道程は私にとってなかなか大変なものでしたが、目の前に広がる美しい景色に感動と興奮を覚えずにはいられませんでした。また、体調が優れない日があったりするなど、パーティの方々に迷惑をかけてしまったこともありました。そんなとき、申し訳ないと思いつつも、皆さんの優しさにふれ、それがとても温かく、有難かったです。山の景色は素晴らしいもので、それ